

プロ選手へのキャリアサポート活動と今後の課題
Jリーグの事例を通じて

社団法人日本プロサッカーリーグ
重野弘三郎

2002年のJリーグキャリアサポートセンター設立をきっかけに、プロスポーツ界を中心に選手のキャリアを考える、具体的にサポートする取り組みが関心から実態へと変化し、国内でもJOCをはじめ、プロ野球など他のスポーツ種目の活動へ拡がりを見せてきた。

本稿では、現在取り組まれている選手へのキャリアサポートを他のスポーツ団体に先駆けて実践してきたJリーグの活動事例を紹介することを通じ、スポーツ選手に対するキャリアサポートについて考察することを狙いとしている。

1. Jリーグキャリアサポートセンターの設立
2. Jリーグキャリアサポートセンターの活動内容
3. Jリーグキャリアサポートセンターの活動成果
4. 今後の課題

特にスポーツを「職業」として日々の生活を送っているプロスポーツ選手の多くは、「職業」を失うことのみならず、選手を終えた後やスポーツ界以外で生きていく「人生設計」においてもさまざまな準備が不十分であることが多く、そのことが転換期を迎える引退時やそれ以降、言い換えると失業後に困難な場面に直面することを本人はもとより周囲にも想起させていることがある。そのため転換期を迎える際、指南役となる者の存在は決してマイナスにはならないが、積極的に求められるまでには至らないことが多かった。

キャリアサポートという言葉は最近聞き慣れてきたが、一口に「スポーツ選手へのキャリアサポート」といっても、サポートを受ける対象となるアスリートの属性（アマチュアかプロか）や生い立ち、個々人の志向によって必要とする支援の方法、またその内容が異なることはいうまでもなく、慎重な対応を必要とすることもある。

以下、Jリーグでキャリアサポートセンターが発足した背景をはじめ、キャリアサポートの具体的な取り組みを取り上げながら、今後の課題へとつなげたい。

1. Jリーグキャリアサポートセンターの設立

設立の背景にあるのは、選手の声であった。日本サッカー界における選手のプロ化は、Jリーグのスタートする8年前である1985年で、翌年の日本サッカーリーグ（当時）から登録されてきた過去があるが、引退後の選手への具体的な職業に関するケアや、その後長く続

く人生設計について、組織としてサポートすることは皆無であった。また、選手側による意識や引退後の対策についても特段大きなムーブメントが生じたようなケースは見受けられなかった。

そのような流れの後、2000年にJリーグ選手協会（JPA;当時）が、Jリーグの一部・二部であるJ1・J2（以下J1・J2）の27クラブ740名の選手を対象に行った「JPA選手包括的意識調査2000」（図1）において「現役引退後の生活に不安を持っている」選手が76.2%に上り、選手が潜在的に不安を抱いていることが表層化した。

この結果を踏まえ、Jリーグ選手協会からJリーグへ、組織としてのサポートが求められた結果、2002年3月にJリーグキャリアサポートセンターが設立された。

Jリーグキャリアサポートセンターは、Jリーグ所属選手が移籍する際にクラブ間で生じる「移籍金」の4%を活動資金の原資とし運営されている。

◆「現役引退後の生活に不安を持っている」選手は76.2%であり、セカンドキャリアは選手の大きな関心事であるが、このことは年齢により、クラブによっても違いがあることも今回のアンケートからわかった。

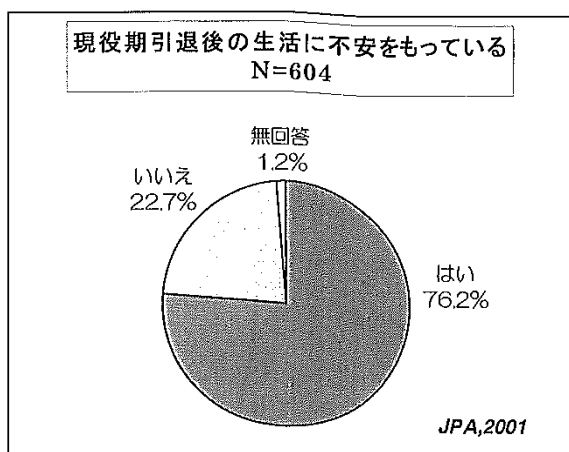


図 1

2. Jリーグキャリアサポートセンターの活動内容

キャリアサポートセンターでは具体的に、「現役選手向けの取り組み」と「引退を迎える選手向けの取り組み」の2つにサポート活動を棲み分け、取り組んでいる。

「現役選手向けの取り組み」では、選手本人が限りあるプロサッカー選手としての立場を認識し、より充実したプロサッカー選手としての生活を送ることができるようなサポートや、自分の人生全般を捕らえた「キャリア」に対する目を広げるための施策を行っている。

具体的には、オフシーズンにおけるインターンシップを通じ、さまざまな職業場면을体験する機会の提供を行っている。

一方、「引退を迎える選手向けの取り組み」としては、次年度の契約更新に関する通知を受け取る毎年11月末頃より、契約が更新されなかった選手へのサポートとして、電話や面

談による個別の相談を受け付けられる体制を敷いている。このとき、多くの選手は移籍し、引き続き選手として活動を続行させることを希望するが、一方で、シーズン中に考えることを避けていた引退後の生活設計や引退後のサッカー以外の就業を考え始める選手もあり、個別に対応している。

Jリーグでは、毎年100名を越える選手が新加入と登録抹消する「新陳代謝」を繰り返しており、加入する選手は6割以上が高校卒業後にプロ契約を締結する。一方で、登録抹消される選手は平均年齢が26歳前後となっている。高校卒業後にプロ契約を結ぶ選手とは、言い換えるとアルバイトの経験など、異なるいくつかのキャリアの経験に不足していることを表している。そのようなことから、前述したインターンシップ制度は異なる職業を体験する機会として、違った角度から職業観を醸成させることや、単純に世の中のあらゆる仕事を覚える機会として年々選手間でも定着してきている。

また、積極的に選手のOBや他競技種目の元選手を起用した講演会などを企画し、体験談を「語る側」と「聞く側」としての機会を通じ、イメージでしかなかった引退後の生活を形として見えるようにしている。

3. Jリーグキャリアサポートセンターの活動成果

キャリアサポートセンター設立による成果は、決して選手引退後の就職先が決まった数ではなく、シーズン中、引退を迎える際あるいはその後、相談できる窓口として機能し実際に自分の人生の相談が可能になったということである。

選手がこれまで「対岸の火事」としてとらえていた（あるいはとらえようともしていなかった）引退後の不安について2002年以前は、高校や大学の恩師を筆頭に限られた相談先が選手たちの生命線になっていた部分があるが、活動を通じ客観的な意見をすることができたり、不安を下げられたりしたことは成果であろう。

また、サポートマガジンを発行し、引退後の歩みを事例として紹介することや、具体的に引退を迎えた選手の雇用を希望する組織を誌上で紹介するといった情報提供を行うことにより、選手であった人たちに再度スポットライトを当てようというように、周囲の理解が進んだことである。

そもそもの「不安」については、金銭的な保障が引退後はなくなってしまうという現実的な面も多く含まれているが、意外に大きい不安の一つは、プロ選手を引退した後、かつてプロ選手を目指していたころのような夢や希望が新しい世界に対して醸成できていないことである。こうした不安に対し、時間を掛けて将来に向き合うきっかけを、親族や恩師、あるいは近い友人以外の存在として共有する機能を有していることである。

4. 今後の課題

プロスポーツ選手が競技から引退することに伴い新たな職業の選択に迫られることは当然の顛末であるがゆえ、予め準備をしておくべき、または当事者で対処すべき問題だ、と

指摘する声は容易に挙がる。

一方、現実に競技の世界に身を置く選手は、進路転換を迫られた際に初めて考え始めるといふケースがこれまでに多く見受けられてきた。

それは、プロスポーツ選手と呼ばれるまでに費やしてきた労力（時間・行動）により得られた成果と、人生を広く・長く捉えられるような考え方、具体的なスキルの獲得機会とを引き換えにしてきたケースがしばしばあることを理解する必要がある。

競技の世界で競争を極め、競技人口の全体から数えるとごくわずかな者しか立ち入ることができない世界に存在する選手は、必ずしも全員がプレーできなくなる日のために準備を進めているというわけではないからである。

また、

プロ選手の引退後の進路がスポーツ界のみならず、時として他に多大な影響を与えるケースが多い（振興と発展）こと

プロの世界へ、高校卒業後ストレートに進んでいるケースが多いため、職業観が少ないケースが多い

という現実があることから、一旦それまでのことをリセットし（選手である過去まではリセットせず）、学びなおす機会を創出し、その後新たな進路を自らの力で目指すことができるように当事者と周囲が認識することであり、そのための具体的な施策を作り上げていくことであろう。

参考文献

- ・「JPA による、日本初！Jリーガーの意識を明確にしたアンケート調査のご案内 JPA 選手包括的意識調査 2000」Jリーグ選手協会 2001年2月13日 Press Release
- ・「LIFE IS PITCH」Jリーグキャリアサポートセンター 2008年